

て幾許か特色のあることを感じた。田舎では手拭をかぶることが裝飾となつてゐる。亦盆踊などにも用ゐる所から、意匠も百端である。亦同じく低級の趣味に屬するが、下町の通客には履物を選ぶ道樂がある。その材料の桐の正目（てま）を選んだり、其の格好を工夫したり、鼻緒を凝つたりして、多くの價を拂ふことを辭せないものがある。

四二 雛 三月の節句に互に雛人形を贈り合ふ事は都下では今もあるが、季節に拘らず、あらゆる雛を集めて興がる人がいくらかもある。雛の極めて幼稚時代から、追々製作の進歩した京都産の内裏雛を始めとし、各地方に製する雛の種類は實に澤山ある。附屬品に至つては更に多くあるが、東京では清水晴風といふ人が一生涯これを集めることに没頭した。今は林若樹氏が譲り受けて所藏して居る。

四三 玩具 これは雛と似た様なものであるが、自から一類をなすほど蒐集家がある。都鄙如何なる地方でも玩具を作らない所はないから、其の種類は實に夥しい。嵯峨人形などは地方産であるけれども、京都に近い爲めに製作が精巧で、今では品によると何百圓の價がある。亡友菊池晚香氏は裸人形ばかり何百と所持してゐた。西洋の人形を集める人も少なくない。是

も亦おもしろみのあるものだ。

四四 小品 何に寄らず小品のみを好む道樂がある。此の數寄者の珍とするは豆と名のつく程の小品であつて、茶器でも本でも文房器でも、小なるほど愛する。但し玩具と混じてはならぬ。玩具に小なるものあれど、此道の數寄者はそれを取らぬ。必らずわざと小形に作つたものを取る。此等のものは、同様の大きな物を作るよりも非常に手数のかゝるものである。數寄者の喜ぶ所は即ちそこにあるのだ。

四五 記念品 大事件、例へば御即位大典とか戦争とか大震災とか云ふ場合の新聞紙、繪はがき、旅行先から記念にとて何くれとなく其の土地の物産類などを集めるものはいくらもある。殊に外國あたりを漫遊する人の内に、到る處さきくで記念品をあつめ持ち歸る人が多くある。蠻島などでは、いろいろ風俗の相違より、妙なものが多くある。それ等は價の高からぬものであり、何人も一寸面白く思ふ所から、記念にとて大抵の人が持ちかへる。すべて此等は記念物道樂の部に入る。

四六 阿蘭陀物 昔ハイカラであつた連中は、外國のものをすべてオランダものと總稱し

て、何でもかでもオランダ物とし云へば興がつて、コップやら織物やら陶器やら金屬類の作品やら繪畫やら書籍やらを愛玩した。今でも文明源流の参考と云ふ様な理窟の下でこれを集めて居る人がある。渡邊脩次郎氏の如きは多くのオランダ物の圖書をあつめて居る。天正頃、スペイン國との交通關係から、色々の物が兎もするとあるが、是等も皆此類に包含されて居る。

四七 切支丹物 昔しは禁制で、マリヤの像などは内證に有つことも出来なかつた位であるが、今は當時の切支丹關係の遺品を珍重し蒐集する人が大分多くなつて來た。此等の人は憂身を窶して聖像は勿論、十字架、踏繪、キリシタン版の書物、其他殉教者の記念品などを集めて道樂としてゐる。

四八 江戸趣味 此の道樂は此頃に至つてしきりに流行する。江戸時代の風俗も今では歴史のものとなり、昔有り觸れたものでも、今は珍しく感ぜらるゝものがいくらかもある。例へば當時の看版や千兩箱や行燈や饅頭箱や、其他錦繪や芝居の立看版などの類、實に數限りもなほどあつて、近頃では此の趣味の雜誌も刊行され、陳列會もあちらこちらにある。

四九 古材 由緒ある寺や宮や橋などの木片を集めて、家を建てたり或は器物を造つて興

がる人がある。著名な例は松浦武四郎が木片を知人に勸進して、それで一疊敷の書齋を作つた。又同じ道樂を更に大規模にやつた例は、山陰道の宍道湖邊の豪家で木幡黃雨といふ人の別莊獨樂山莊は史的古材を集めて作つてゐる。その材は浪華の四天王寺の扉や、隅田川言問コトヒの古材や、大同年間の出雲の清水寺の古材や、天平、應永、慶長あたりの色々のものを寄せ集めてゐる。尙ほ又千年以上の名刹の木片で、香篋や硯箱などを作つて喜んでゐるものは澤山にある。

五〇 竹器 曾ては全國各種の竹幾百種を集めて、書齋の壁に装置した博物館長もあつた。故徳川頼倫侯も竹の蒐集家で、茶筌ばかりでも百種近く集められた。竹器は廣く行はれてゐるから、此方面の採集家は勿論多くある。

五一 石 自然石が賣物となつて居るのは世界中日本ばかりだと云ふ。(建築用の石材は別として)支那と日本ほど自然石に興味をもつて居る國は無い。庭石を多く集める人も少なくないが、机上の置物、或は花に配するなどの爲めに眞石マシを多く集める人もある。或は畸形の石のみを、或は支那の太湖石、靈璧などを集めるもある。随つて此等の石の價は不廉なものである。

五二 石燈籠 を道樂の部に入る、は妙なものであるが、これが作庭の大切なものであつ

て、茶人は専ら力をこれに罩める。これには種々の好みもあり、時代や作者や形式などいろいろの注文があつて、製作が甚だ面倒である。自分の氣に喰つた夜燈を寸時も目先から離すまい、と細川幽齋であつたか、旅中にも之を携へたと傳へられてゐる。今も高橋帚庵氏の如き、古來有名な各種の石燈籠を幾十基となく摸製し、樂んだ擧句、護國寺の境内に置いてゐる。氏は此の部類の稀なる道樂者と云ふべきだが、それほどでない例は、寧ろ茶を理解しない方面に相當にあつて、矢鱈に庭園に夜燈を置くために、庭の風致をメチャ／＼にするものもある。

五三 籠 は各地方に於て産し、各々其特長がある。材料は主として竹であるが、アケビの蔓や其他地方特有の材料を用ゐて、手工に巧拙はあれど概して雅趣がある。其用途は種々で農漁それ／＼に依り變化がある。其手頃の者は都人士に取り上げられて意外に出世し、或は茶室に用ゐられ、或は机邊の塵壺チヤウなどに取り立てられる。此道樂をする人も少なくない。支那製の時代ある物となると、頗る高價のものである。

五四 烟火戲 今は甚しく衰へたが、昔し盛んであつたものは火戲であつた。夏の兩國橋下は花火の爲めに殷賑を極めた。墨水は游船を以て塞がり、兩國附近の家屋も道路も人を以て

埋まつたものであつた。花火の製造元たる玉屋、鍵屋は今も存して川開きは往々行はれてもゐるが、花火は附近の料理屋、待合などの景氣づけにやる位で、昔しに較べると甚だ貧弱である。蓋し此道の道樂者流が少なくなつたのであらう。兩國の盛時には、諸大名が道樂に花火を打上げた。多分諸藩が勢力の宣傳に競うたものであらう。今日何々デーといふ様に、某夕は鍋島、某夕は前田など、いうて、大衆はその花火を見て優劣を評したものである。亦游船を泛べてゐるものも、今日の様に唯打上がる花火を打詠めて興する計りでなく、玉屋、鍵屋に命じて特に適意のものを打上げさせた。全體人氣を煽る豪快の事であるから、資力あるものは自然これを道樂とし、往々みづから此技を研究もし、工夫もし、意想外の仕掛花火で大衆にアット云はせ、巨資を抛つて快とするものもあつた。

五五 スポーツ 洋式遊戯が發展した事は十年以降の偉觀である。ベースボールや、テニスや、水泳や、ランニングや、ボートレースや、スキーが、頗る大規模に行はれて幾萬の觀衆場に充ち、兩國の相撲の株を奪はんとする概がある。國際競技に於ても我邦は引けを取らず、或る競技は世界のレコードを破り、その驚異となつてゐる。随つてこれを興とするものが各所

に起り、遊戯者に聲援を與へ、若くは物質的援助を與へて、外國に出征せしめるに至つた。尙又スポーツの一として競馬も數へねばなるまい。これも近來盛んに行はれ、立派な人を會長として競馬會が起つてゐる。馬券を發行する爲めに益々人氣を煽り、女流までが熱狂してゐる。

五六 電氣 電氣道樂とも云ふべきものが追々認めらるゝ。ラヂオの熱心家があることは言ふまでもないが、新しい事を喜ぶ方面には、生活に必要な設備をすべて電氣仕掛とし、燈も爐も火鉢も竈も炬燵も洗濯道具もすべて電氣に頼らんとして、家の構造をそれに適ふやうにしてゐるものがある。これ等も電氣の道樂と云へようか。發明心のある面々は電氣の利用に種々の工夫をして、憂身をやつしてゐる。案外實用になる事が工夫されるといふが、此の道樂は若い人の間になかく廣く行はれてゐる。

五七 寫眞 明治以來非常の勢を以て廣汎に行はれ出したものは蓋し寫眞道樂であらう。輕便の寫眞機が益々工夫され、寫眞を適用する區域や事柄が愈々多くなるにつれて、此道樂は幾んど無限に擴がらんとする傾向がある。専門家は寫眞に精しいが、寫さるべきもの、選定と趣味に至つては到底素人の寫眞道樂者に及ばない。近年又活動の映畫が流行して、寫眞の爲め

に虹の如き氣を吐き、映畫を味ふ一種の道樂が盛んに行はれ、演劇を壓倒せんとする概がある。

五八 ポスター 此言葉の行はれ出したのは近年であるが、ポスター其物は古くから行はれ、之を集める道樂も古くからある。各商鋪の仕切判を押したペーパーを集める道樂は昔からある。引札や報條を集めるものもあつた。マッチのペーパーを集める道樂も此類に屬する。歐洲大戰に各國で宣傳の爲め發行した、ポスターは夥しいもので、中には名工の手に成つたものもあり、意匠も百端で興味のあるため、道樂にこれを集める人もゐる。芝居の繪看版も亦此類に屬する。

五九 郵便切手 を弄ぶことは前項と似た道樂である。此切手は世界各國現行の切手の種類だけでも意外に多くあるが、既往に發行されたものとなると愈々數が多く、中には頗る得難い物もある。偽造を防ぐ意匠にも様々あつて、此點は形こそ小なれ紙幣と趣を同じうする。多く世に知られない島嶼などで發行するものなどが抵ね珍とさるゝ。此趣味家の範圍に「郵樂」と云ふ雜誌が出てゐる。

六〇 納札 神社佛閣へ參拜の記念に、銘々意匠を凝らし、己れの名をも入れて版にした

札を張ることが今でも俗な範囲に行はれて居るが、此の納札の珍しいものを集める人が古來尠なくない。帝室技藝員の竹内久一氏も此の道樂があり、西洋人でも此の趣味に熱中して、納札博士と綽名を受けた人もある。是も矢張り古い稀な物を珍とする。此事の祖と云はれて居る、天愚孔平の納札は極めて稀なもので、此道の數寄者はこれを得るに腐心する。納札には廣重、北齋などが繪を書いて極彩色にした贅澤なものもある。

六一 繪葉書 外國の繪葉書のみを集める人、郵便に託した者のみを集める人、繪はがきとし云へば何でもかでも集める人等さまざまあつて、一種繪畫の趣味から來た道樂で、絶えず是に没頭して居る者がいくらかもある。決して兒女などの戯れにやる道樂でなく、有髻の人の眞面目に遣つて居る道樂である。

六二 筥 を蒐集する一脈の道樂がある。筥にも頗る種類が多い、ザット列擧して見ると、經箱、茶箱、硯箱、筆箱、香箱、印箱、鏡箱、櫛箱、短冊箱、色紙箱、面箱、鼓箱、菓子箱、狀箱、用捨箱、辨當箱、重箱、饅頭箱、烟草箱、藥籠箱、密棧箱、幅箱等、咄嗟に二十數種位を數へることが出来る。此等の箱は其の用に依つて形式が異なり、製作の意匠は百端で、美術

の粹を盡してゐるものが少なくない。一概に容器と云へば、ボール箱でも濟む様なものだが、それは西洋あたりの風で、日本では箱を裝飾として重んずるから、蒔繪や螺鈿を鏤した名工の作もあり、利齋などの作つた木地のものもある。全體應用の利くものであるから、本來の用が廢つても適當に利用されてゐる。例へば漢方醫の携帶した藥籠の如き、又饅頭箱のごときは、今は不用に屬してゐるけれども、其の製作が如何にも精巧である爲めに、さまざまの容器に用ゐられてゐる。元來茶人は多く器物を取扱ふ關係から、箱とは深い緣因があつて、裸の器物の爲めに適當の合はせ箱を搜すのが常であるが、その流を汲み、箱を道樂に寄せ集めてゐるものもある。

六三 墨斗^{イダテ} を集めるのを道樂としてゐる好事家も往々ある。今は鉛筆や萬年筆のやうな輕便のものがあるけれども、昔しは墨斗が必ず腰邊に纏はれた。勿論武家には武家相應、商家には商家に恰當のものがあつた。天正慶長頃の戰國時代には首級を録するに陣中頗る大なるものを用ゐた。柄が一尺三四寸もあり、墨壺もこれに應じて大きなものであつた。商家のものでも魚河岸邊のものは大きなものがある。しかし普通は成るべく輕便を尙び、徳川時代の太平の

天地となつては、コンナ物にも精一杯の技巧を凝らし、印籠や烟具と同じ様に數寄を極めた。勿論其の形式も材料も甚だ多様で、名工の作品も少なからずあるので、精力を此のコレクションに集注する人もある。

六四 瓢 千瓢を差し物とした豊太閤は愛瓢家であつたかどうか知らないが、瓢を集める道樂は昔しからある。瓢の持寄り會が往々に催され、各々天狗を競うてゐる。瓢は酒器であるから、酒客に此道樂かあらねばならぬ。頼山陽なども愛瓢家で、他人が名瓢を所持して居れば執念く懇望して手に入れねば已まなかつた。勿論大小形状さまざまあつて、最小のものは豆大である。口部、腰邊、底などに種々の註文があり、雁の首のやうに曲がつてゐるのを珍としてりしてゐる。勿論光澤や色がやかましい。瓢も流石に酒客の愛器である丈に、酒を多く入れしばしば取替へねば、よい色と光澤が出ない。又佳酒を入れ、ば入れるほど、よい色と光澤を發するなどは、酒客によく似て居る。日本で佳瓢を産する所は熊本であると云ふが、支那産の瓢が重んぜられ、名家手澤の來歴があると、一層珍とせらるゝ。

六五 盃 の意匠も百端である。陶瓷あり、金銀あり、漆器あり、又その形貌模様なども

種々で、如何にも多様である。概して形の小なる爲めに、蒐集して陶瓷の標本とする人が少なく無い。大抵の名人は必らず盃を造つて居るから、作者の標本にもなる。

六六 扇 に就ては「漫興偶録」に書いたから、爰には解説を省略する。

六七 團扇 は扇と似た趣味であるが、較々俗な趣味である。これも製産地により、いくらか異なつて居る。大小さまざまあり、大なる者に至つては一人で振り廻はされぬ様なものもある。錦繪のある者、文人風の畫のあるもの、版畫、肉筆、さまざまで、肉筆物には光琳の筆などもあるから、一本幾百圓の價のあるものもある。大阪で日本のあらゆる製産地の團扇を集め、千近く所持して居る人がある。いつか京都の大丸で借り受けて陳列した時に一見した。松浦武四郎は名家を訪問する毎に必らず腰に一本の濫團扇を挿して出かけ、それに書畫を請うた。今それが屏風に張られて保護されてある。随分多い道樂である。

六八 發掘物 考古癖で、古墳から掘出すものを蒐集する道樂がある。大抵どこの國でも貴人を葬るには、遺愛の品を棺に納める慣習がある。或は又遺愛の物に擬してさまざまの物を作り、棺中若くは塋域内に埋める慣習もある。埴輪などがそれである。帝者の墳墓となると、

此の品種が頗る多く、生前使用したあらゆるもの、例へば圖書、什器、家屋、車駕の類より、愛寵の宮嬪、鳥、犬などまで摸して塋域に埋めるが、多く陶製で、すべて此等のものを明器メイキといつてゐる。だから古墳を發けば、漢魏、六朝、唐宋の古器がある。日本でも古墳から刀劍、馬具、矢の根、曲玉、管玉、金銀環等、上代のものが掘出され、昔しから考古家に玩ばれてゐる。支那では、久しい間葬具を忌んで玩ばなかつたが、考古家が漁り出してから盛んに市場に出で、各國へ輸出さるゝに至つた。支那では硃が貴ばれて、貴人の屍體には多くの硃が装填されてゐる。殊に耳、鼻、口、陰部などを硃で塞ぐ慣習がある。鶏卵形の硃などは陰部に装填するものであるのに、それを知らずにひねくり回して玩んでゐるもの、あるのは可笑しい。朝鮮の古墳には古陶器が多く埋藏されてゐるので、貴人の墳墓は日韓合邦前幾んど掘り盡され、すべてガラ明きになつてゐる。貴重器物や時代の参考になるものが多く出る所から、此の蒐集が道樂となるのも不思議はない。

六九 博物本艸

昔し漢方醫術の隆盛時代に本艸ホンショウと云つたものが今の所謂博物である。醫

家の感化も手傳つたに相違ないが、本艸道樂をやつた人が少なくなかつた。葦葭堂木村異齋は

最も聞こえてゐる人だが、大名などでは、島津重豪が此道樂で知られてゐるし、富山の領主は賣藥を奨励した丈に、自身も本艸に熱中し、曾て「本草圖彙」を版刻刷行せんため、有名な本艸學者を招き、圖版を作るために一工場を起し、そして出した者は精巧無比のものではあるが、多くの版が出来ない内に火災で工場が焼けた爲めに其の掛りの役人を刑するに至つたといふので、此の圖譜を人殺し圖譜と云うてゐる位、悲惨の記念物となつた。富山侯の道樂の熱狂さが窺はるゝ。全體禽蟲、魚介、礦石などを學術研究に資せん爲め蒐集するは道樂とは言ひ得ないが、敢て研究に意あるにあらず、唯奇を好む所から蒐集につとめた者が昔しは甚だ多かつた。例へば海濱にある好事家は貝を集めることに没頭して、其多きを誇り、其奇を衒つた。それと同じやうに礦物の標本を多く集めて、小仕切りをした重ね箱に納め、産地などを注して大切につたものもある。越後高田の藩老鈴木某が多年熊を殺して其膽イの研究を遂げ、一書を著はしたなどは、兎に角研究が主であるから道樂とも言ひ兼ねるやうだが、動もすると一種の道樂と見做されやすい。尙ほ自療のために家庭に種々の藥物が多く貯藏されたことは自分の幼少時代知つてゐる通りで、犀角ニシヤクだの、ウニコオールだの、人蔘ニンジンだの、其他當時名高い賣藥烏犀圓、紫金

錠、奇應丸、熊膽などは大抵家に藏して、急患に用ゐたものだ。これが遂には道樂となつて、各地に名高い賣藥を多く集めて、其の收藏の豊富に誇つたものもある。又阿蘭陀趣味から歐西の藥物を集める道樂もあつた。

七〇 烟草 此の道樂は最も多いから特に注意するまでもない位だ。喫烟家の趣味は向上限りのないものであるから、追々佳品を選ばうになる。甚だ不廉の道樂であるが、到底自製の出来ない程のものである。此の道樂に附屬してパイプやシガレット・ホルダーの佳品や稀物を玩ぶ道樂も自然起つて来る。此道にはなか／＼の通人がゐる。「烟草禮讚」などの本も出版されてゐるが、所詮は此の道樂の表現に過ぎぬ。烟管や烟包の事は別項に擧げたが、これは西洋趣味に屬するから爰に項を別けて一類とする。

七一 菓子 此の道樂は餘りに有觸れてゐるが、廣汎に亘る趣味であるから逸する譯にゆかぬ。大體乾菓子と蒸菓子に分れてゐるが、地方により各々特産があつて、例へば加賀の落雁、越後の越の雪などは乾菓子の關脇位に及第してゐる。東京に多くある菓子舗でも、それ／＼得意なものがあつて、菓子通は羊羹はどこ、金鰐はどこ、と遠きを厭はず買ひに行くほどの熱が

ある。私の知人で菓子道樂の人がゐるが、菓子研究のため全國に行脚しての實驗によると、羊羹が一番普遍のものだと云つてゐる。此人は菓子の商標を蒐める道樂があつて、それを集める爲めに田舎道を二里も三里も歩くことがあると語つた。追々西洋菓子が盛んになり、日本固有の菓子は段々壓倒さるゝ氣味もある。洋風の菓子もなか／＼種類が多く、これにのみ偏する道樂者流もある。

七二 珍奇 道樂には珍奇を要求することが多くの場合一條件となつてゐる。併しある一類の趣味に偏しての道樂となると、數量の多きを貪ることになるので、珍奇一點張りといふ譯にゆかない。然るに爰に物の種類に頓着なく珍奇を本位として蒐集する道樂がある。昔し曲亭馬琴一輩の好事家は耽奇會といふを催し、珍奇のものを持寄り、其の記録として「耽奇漫録」といふ書が残つてゐるが、これも此脈を引く道樂である。珍奇は古來好事家の喜ぶ所であるから、寺社などの寶物に假託のものが少からずある。敦盛の青葉の笛だの、辨慶の負うた笈だの、靜御前の舞扇だのといふたぐひは皆此類で、俗衆は貴重の書畫などに目をくれず、此種のものにのみ目を留めるから、それが呼び物になつてゐる。凡そ珍奇のものは或る範圍を超える

と多くは假託のものである。例へば兼好法師が高の師直の爲めに代筆した艶文とか、大石良雄の祇園遊びに着用した小袖とか、名妓高尾が焚いた伽羅などいふ様なものは、珍奇家は嬉しがるけれども皆贋造のものである。併し珍奇は必ずしも此類のみでなく、時代の若いものには假託でなく珍奇とさるゝものもある。例へば定遠、鎮遠の支那軍艦に用いた食器とか、日本最初の汽車に彫りつけある製造會社の商標の拓本、旅順の沈没船の材料で作った器物、幾百萬圓の紙幣を焼いた灰で製した器具や像や、有名な人に投じた爆彈の破片、大バニツクでモラトリウムを行つた折、一夜作りで十一億圓を發行した、片面摺りの二百圓紙幣などの類を珍重するのは皆此道樂に屬する。

七三 冒險 は學術研究の爲めにするものは道樂とも云へぬが、冒險そのものを趣味とするものがいくらかもある。乃ち先天的に冒險が好きで、人の危むことをやつて興とするものがある。南北兩極の探險を始めとし、不毛の蠻地を跋涉したり、飛行機に乗つたり、猛獸狩をしたり、直立の山嶽に登攀したりすることなどは、壯烈痛快の事として神馳魂飛、亦安危を思ふの違ないものがある。但だ此の趣味はありながら果し得ないのは、探險などは頗る多費を要し、

併せて大規模の設備を要する爲めに制さるゝのであるが、追々此の方面の道樂が開拓されつゝ、あるのは事實である。

七四 探奇 人には秘密を知りたがる本能がある。秘密の物が必らずしも奇でないが、秘密にさるゝとそれが奇となり、兎もすると探奇の道樂が起る。世の中に秘密となつて内容の知らない者が少なからずある。牢屋、鑛山のドン底、顛狂院、癲病院、潜水夫のみ知る水底、火藥庫、貧民窟、貨幣を作るミント、貨幣を收藏する銀行の地下金庫、アトリエの裸女モデル、乞食生活、昔し大阪に行はれた男女傭引の場所ボン屋と云つたやうな所は、其悉くが出入を禁じてゐる處でもないが、容易に入り難い爲めに種々の想像を馳せて、其の秘密を知りたがり、種々の面倒と危険を侵して探るものがある。従軍の冀望を起したり、探偵の眞似をしたりするものも皆探奇道樂の一端であり、各種職業の秘密を知ることゝも矢張り同じ脈に屬する。今日は社會問題が重要視され、社會局なども出來、社會の暗黒面が研究さるゝやうになつたので、探奇道樂に相當理窟も附いてきた。又這般の道樂で獲た材料を新聞紙が掲載するやうになつたら、此種の道樂者流は凱歌を奏してゐるであらう。

七五 登山 も旅行部類のものであるが、近頃の登山は昔しとは趣を異にして、アルパインストに倣つて、これまで人の登攀を絶対不可能とした、直立の岩壁に攀ぢ登ることが行はれ出した。それには本場のアルプスに實驗を経た専門家もあつて、宮様までが此の冒險をやるやうになつた。又雪中高山にスキーを試みることも起つた。山岳登攀は餘程進んで來た。

七六 探勝 昔しから風景鑑賞の素養のある邦人は、交通の便利が開けてから、一層觀光旅行が廣く行はれ、觀光團などが各地に組織されて、便利に目的を達し得ることになつた。勿論内地に止まらず、世界各国に踏み出すことも頻繁となつた。併し道樂に旅行を事としてゐるものがある。それは聞さへあれば出かけて歩き、或は温泉廻りをしたり、未だ經過しない處を、遠近を論ぜず、交通の不便に關せず、訪ねることを興としてゐる人がいくらかもある。内地の旅行家には坪谷水哉氏があり、世界の觀光家には志賀重昂氏があつた。

七七 掃墓 名家の墳墓を尋ね廻り隠れた墓を搜索するを以て趣味とする一脈が昔からある。掃墓會といふ様なものが此等の趣味家に由つて起され、互ひに各々の發見を持寄り、交換するやうなことは今でもある。此の趣味に附隨するのは碑面を撫して拓本を取ることである。

これも亦一種の道樂である。

七八 漁撈 は昔しから冷熱なく行はれてゐる道樂である。大公望を氣取つての釣りも行はれてゐるが、投網トアミも盛んである。岩崎久彌男が投網の名人と云はれ、幸田露伴氏は隠れもない釣客である。

七九 狩獵 此道樂は維新後特に盛んになつた。今は蠻地へ出かけて虎や象を狩ることまで行はれて來た。斯様な狩獵は大袈裟の仕掛と多費を要するから、ブルジョアでなければ企てられない。併し狩獵の極致と云つたら此等であらう。皇室には鹿狩といふがあつて、外賓を饗應する一端にも供されてゐるし、獵期になると、何事も差措いて山野に出かけるものが少なからずある。中には一羽の鳥も射當てぬ族ヤカラもあるが、それ等の人に云はせると、興は獲物にあるのでなく、獲物があらうといふ望ホッにあるなど、負け惜しみを云うてゐる。狩獵に伴うて獵犬が必要であるから、随つて獵犬を擇ぶ道樂も勢ひ起る筈である。

八〇 相撲 昔しは各藩の諸侯に相撲道樂があつて、屈竟の力士は抱へられ保護されて、互ひに雄を競つた。今はそれが無くなつていくらか衰運に向つてゐるが、好角道樂は不相變盛

んで、木戸御免に値する熱心家が頗る多い。殊に最近ラヂオを應用して、相撲の取組から其の取口まで仔細に放送することになつて、好角家は居ながら相撲見物をしてゐる思を爲す便利も開けたので、此道樂は益々鼓舞されてゐる。

八一 劇 觀劇が道樂の一であることは言ふまでもないが、劇の趣味からしてそれに關係あるいろ／＼のものを集める道樂が昔しからある。俳優の似顔繪、番附、脚本、評判記、繪看板、衣裳、カヅラ、俳優の墨蹟などの蒐集をやるのがこれである。日本ほど劇の資料に富んでゐる國は世界に無いと云はれてゐる。随つて蒐集の範圍も廣く、數も夥しいものである。早稻田大學で坪内逍遙博士の記念の爲めにと計畫しつゝ、ある演劇博物館は斯道の研究に資せんとするものであるけれども、劇道樂の人には此上ない閱覽場である。

八二 音曲 此の道樂も昔しからある。古いことの多く棄てらるゝ世の中に謠曲が流行して、これを道樂とするものが多く、長唄其他の俗曲が眞面目な士林の間に行はれてゐるのも一奇觀である。一方には西洋音樂が日々に昌つて來て、歐西の大家も時々乗り込み、其演奏はいつも満員の盛況を呈する。活動寫眞には此の奏樂が常に添物となつて入場者に喜ばれ、恰かも

昔し撫箏を上流女子の大切の藝として訓練したやうに、ピアノを彈することが相當の階級の女子の大切の藝となつた。

八三 假面 を蒐集する道樂は能の趣味から來てゐる。しかし假面は能に用ゐるものばかりでなく、種々のものがある。手廣く集めるものは、外國のものまでも漁る。能の假面には、新古を問はず多きを食するものもあり、名作のみを漁るものもある。一時能の廢つた頃、名家の所藏品が二束三文に賣られたこともあつたが、今は不廉な道樂である。勿論假面を趣味とする因縁から、能裝束にまで手を延ばすものもある。

八四 出版 出版された書物を買ひ集める道樂は別に掲げたが、自から書物を出版するのを道樂としてゐるものがある。それは必らずしも賣るを目的とするのでない。娛樂に出版するので、出版其物が趣味であるのだ。昔しから好事家が凝つた本を出版して同人の間に頒つことが行はれてゐるが、乃ちそれは此類に屬するもので、今でも自家の隨筆などを家藏版で折節刷りする人がある。大きな物を愛する人に對抗して皮肉に豆本などを作る人や、公刊の出来ない性質のものを自版で發行して興がるなどは皆此部類に屬し、其物は多く流布はしないが、ヒネ

リ物が往々にしてある。

八五 番附 は芝居と相撲のとが通例であるが、その流行時代には何もかも番附の式に作つたことがある。學者、僧侶、文人、墨客は勿論、藝者、變童、娼妓、私娼、茶屋女に至るまで番附があり、人格のない寺、宮、橋、樹木などにも番附があつて、それ等が相應に玩ばれ、時代を経ると、それらの變遷なども窺はれて興味もある所から、分類的に或は時代順に番附蒐集を道樂とするものが今でも可なりにあるから一類として擧げる。

八六 手工 自からいろくの物を製作する道樂がある。手づくねで種々の器物を作り、竈に入れて焼くものもあり、大工道具をつかつて箱などを作るものもある。紙捻や竹などで器物を編んで作るものもある。表具屋の仕事を自から營み、表装をするものもある。或は製本をしたり、野版を摺つて界紙を作つたり、或は版木を彫つたりする者もあるが、皆手工道樂で、終日これに没頭し、何寄りの慰としてゐるものがある。今飛行機などを小形に試作するのは矢張り同じ脈から來てゐる。平賀源内の種々な文明的工夫も、恐らく手工道樂の結果であらう。

八七 十二支 に因んだ物を集める道樂が可なり廣く行はれてゐる。これは自分若しくは

家族の生れ年に當る干支の獸類を愛玩するのであつて、馬牛虎兎猿鳥犬などを何に依らず廣く集めることが一種の道樂となつてゐる。俗説にこれを携帯すれば魔を除けるなど云うて、例へば虎年に生れたものは、其の持物に虎の金具をつけたり虎の根付をつけたりすることが流行つたこともあつた。併し骨董趣味から此道樂をやるものが多く、買物でも圖書でも書畫でも、例へば午年と云へば、あらゆる馬に因んだものを集める。終にはそれに附屬する馬具、馬蹄にも及び、馬に關する詩や歌や療馬の醫書などまでも網羅する。現に巖谷小波氏は午年に生れたもので此道樂を以て聞こえてゐる。千馬の所藏があるので、それを納める厩を作るに、千馬行の詩を詠じたり、自から馬を畫してそれを同好に頒つて建築費を募つたりした。

八八 福神 幸福を祈り長壽を冀ひ富貴を望むの心から、幸ひを齎すと傳へらるゝ七福神を始め高砂の尉姥などの繪畫や器物を寄せ集める道樂もある。七福神の中にも大黒と恵比須が最も人氣があつて、此の二者を蒐集の中心とするものが多い。此の趣味は低級に屬し、下町邊に多くある。オカメの繪畫や玩具などを集めるのも笑門福來の趣意から來るので、迷信の行はるゝ所には御幣を擔ぐ者が多いが、投機を業とするもの、冒險を職とするものに殊に多くあつ

て、此等の範圍に此道樂が行はる、西洋でも幸ひの神と名を命じたピリケン始め種々の玩具がある。福神の蒐集家は此等をも羅致する。

八九 生殖研究 淫猥のものを集める道樂は各時代にある。春畫の事は別に擧げたが、此方面にはいろいろのものがある。例へば四ツ目屋に賣つた媚樂や猥器などを始めとして、陰器、陽器に擬した種々の作品、喇嘛の歡喜佛などを集める卑猥の道樂もあつた。それは勿論内密に行はれてゐるのだが、近世性の研究といふが始まつてから、古い傳來の玩具などに學術的見解を附して生殖に關係ありとなし、どれ此れの別なく公然蒐集することになつた。其道の研究家は別として單に道樂とする側には、云ふに忍びないものまでも集めてゐる。

九〇 遊里物 の蒐集は白粉臭い道樂である。例へば遊女の枕や、髮具や、衣裳や、名妓手澤の品や、其の穿てる木履や、さし傘に至るまで、すべて花街に用ゐたものを集める道樂を、假りに遊里物道樂と云ふ。

九一 春畫 風紀の取締が嚴であるから、表面知れないが、春畫を集める道樂は意外に多くある。古來畫界の名人は必らず此の方面に筆を弄して居るから、珍しい物が澤山ある。昔し

大名で此の道樂をやつたものも相當にあり、故人中上川彦次郎氏は此道の數寄者として評判があつた。堅くるしい意外の人で、内々此の道樂をやつてゐる人が少くない。

九二 浮世繪 此の蒐集の道樂は餘りに知れ渡つてゐるから、爰に註するに及ぶまい。此繪も畫の一種であるけれども、手廣く行はれてゐるから、特に一類としたのである。

九三 勝負事 社會の或る階級を支配してゐるものは射倖心である。勝負事と云へば何に寄らず熱中するものがある。碁將碁に凝つてあたら時間を潰し、夜深しをするもの、競馬と聽けば百里を遠しとせず、出かけて輪贏を争ふもの、富籤若しくはそれに類似のものに手出しを禁じ得ないもの、株や米穀の相場に精神を勞するもの、等、等、男子に限らず婦人にも少からずあるが、これも亦道樂である。

九四 惡喰ひ 喰ひ道樂の内にかもの喰ひ道樂といふがある。毒ありとされてゐる河豚のごとき、其他常に食料にされないものを好んで喰ふのが此の道樂である。兩國橋の一端に昔しからモモンジ屋といふがあつて、種々の獸肉を賣つてゐるが、猿や兎や猪の類は必らずしも常食外れのものともされないが、蛇や鼠や熊蜂などを喰ふのは惡喰ひと云はねばならぬ。今で

は所在蛇を割烹する家もあつて、人に精分をつけるといふので、野球家などは好んで食し、又珍味として道樂に食ふものがいくらかもある。イナゴや蠶の蛹は昔時から田舎で喰ふものであるが、熊蜂や鼠や鳥などを喰ふのは悪喰ひに屬する。此等にはそれ／＼調理法があり、これを好む人は如何にもうまさうにいうてゐる。此部に屬する著名の例としては大阪動物園の園長林佐市氏を挙げねばならぬ。先頃「食道樂」(雜誌)に就て見ると、氏は園中飼養の動物が斃る、毎に其の肉を喰ひ、其數二百種に及んでゐると自白し、犀などは五萬圓の價があるから、其の一切りの肉が七十五圓に當ると書いてあつた。

九五 飲料 近年都下に激増したものは、カフェー・ハウスである。大震災前には飲料と云へば珈琲、紅茶、ラムネ、サイダー、平野水位に過ぎなかつたが、今は頗る多種で、銀座邊の可なりの店のメニューを見ると、數十種の飲料が行列をしてゐる。夏向のもあれば冬向のもあつて、其の發展に驚かざるを得ない。大體酒を取扱はないが、簡単なランチが取れ、菓子も果物もある。尙ほ酒類を取扱ふビヤ・ハウスも昔しの銘酒屋の如くに殖えて、西洋に於けると同様、東家にビールを傾けて西家にランチを取ることの出来るやうになつた。眞面目なカフェー

エーのウエーターは男子であるが、ビヤ・ハウスには女給がある。それが若い人達を惹きつけて、毎夜出かける者が少なくない。眞面目なカフェーへは外人や紳士も立寄るが、女學生、藝妓などが繁々足を運んで一種の道樂となつた。

九六 飼禽 小禽を飼養する道樂は、昔からあつて冷熱が無い。是には流行があつて、ある物が莫迦に珍重される。往々所有地まで賣却して禽を購ふものすらある。近年流行のものは十姉妹と胡錦鳥などである。十姉妹は古く支那から渡つたもので、是まで等閑に附されてゐたが、近年大いに流行し出した。此禽は三寸五六分の身長で、羽色は概ね白で、茶褐色或は柿色の斑がある。相互極めて仲のよい所から此名がある。胡錦鳥は濠洲に産し、近年渡つたものである。これも可愛らしい小禽で、其の最も美麗なるものは頭部が赤で、胸が紫、腹部が純白である。濠洲では此禽の絶えんことを慮つて、輸出を制限してゐるために、一層珍重がられてゐる。此等の小禽は相當の價があるので、其の蕃殖を圖つて家計を補ふものもあるが、趣味本位で飼養するものも少なくない。そして現今小禽道樂のオーソリティーは鷹司公であるといふも一奇だ。公は鷹を司る家筋であるから禽を趣味とするのも偶然でない。公は小禽の視察と研究

で近年世界を漫遊し、獲る所少なくないと云はれてゐる。

九七 園藝 是も手廣く行はれてゐる道樂である。家庭經濟の爲めにやるのは必らずしも道樂と云へないが、賣るを目的とせず、娛樂本位でやるのが此筋の道樂である。抵ね大なる邸宅、別莊、田園を有する者に此道樂がある。花卉ばかりでなく、果物も蔬菜も栽培する。そして花卉で多く道樂となるものは菊、朝顔、牡丹、躑躅などいろいろあるが、追々西洋花卉が盛んになつて、薔薇、スウキートピー、ダリヤ、フロックス・ドラモンデー、チューリップ、アネモネ、百合などが喜ばる、様になり、園藝に一段の殷賑を來し、これに伴うて温室やグリーン・ハウスを要し、道樂は一層濃厚になつた。昔しから此道の道樂者流は僂指に違ないほどあるが、「菊經」の著者として有名であつた水戸支藩の守山侯は餘りに菊の道樂に没頭したので、幕府の譴責を受けたこともある。近年では大隈侯が菊の道樂を以てひとところ第一人者に數へられたが、それよりも蘭の道樂の方であつた。果樹に就ては田中伯の經營が盛んで、岩淵の別莊地の大部分幾萬坪は果樹園である。

九八 盆栽 作庭に要する庭樹に物數寄を凝らすこと昔しと異なる所ないが、盆栽に多少の面目を改めたのは西洋の花卉の盛んに行はる、ことである。それから高山植物の採集道樂が起つて來たり、雜草に興味を有つ人も出來て來た。故徳川頼倫侯は、大磯の別莊に、附近三十里内の雜草を千種も集められた。昔しから風流人に珍とさる、蘭や菊や梅などの類も不相變持てはやさる、が、蘭は取りわけ世界の各種を集めることを道樂としてゐる人がいくらもある。故大隈侯なども其一人であつた。又時々の流行物に熱中する道樂者流もある。萬年青や萬兩に熱中したごとくに。

九九 寄席見世物 寄席に毎夕通うて講談や落語や義太夫、物真似を聽く道樂もあつた。概してコンナ事に興を有つ道樂者流は、聽く計りでは満足せず、みづからやつて見たくなり、往々黑人に近いものも出で、壇に登るまでに至つたものもある。見せものも、曲馬や球乗り、其他洋風の種々新奇のものも行はれてゐるが、昔しは頗る種類が多く、中にはたわいもないものや、猥褻、風紀を紊すものもあつたが、それを婦人子供のみでなく、有鬚の男子までが其の見物を道樂にしたもの、あることは、觀劇を道樂にしたと甚しい違ひはなかつたのである。

一〇〇 病的道樂 道樂を數へれば、百に及んでも尙ほ盡きたとは云へぬ。最後に雜類の

一項を設けて、前に洩らしたものを書けばいくらもあるが、爰に漏らし難いものが一つある。それは私が假りに名づけて病的道樂といふ一種變態のものである。支那日本に癖顛といふ語があるが、其の顛は病的で、西洋で所謂マニヤに當るのである。此のマニヤは軽いのと重いのとある。軽いのは大抵の蒐集家にある。唯軽いから目立たず、蒐集家自身も自覺しない位だが、實はマニヤに罹つてゐるのである。世の中の流行に雷同して一概にそれに倣ふなどもマニヤの作用である事は言ふ迄もない。此の病的作用の甚しいものになると、理性は其働きを失つて、趣味も鑑賞もなく、蒐集が全然盲目的となる。斯くの如き者が所謂顛の範疇に入るのだ。さて此種の例は私の知る所では二つある。さる知人の家の婢女に新聞の反故を意んで集める奇癖のあるものがある。其の反故は決して保存を要する意味のあるものでもなく、面白い記事や繪があるでもない。唯新聞とし云へば、斷片と雖も紙屑籠に葬むるを惜んで、必らず拾ひ上げて自分の行李に收める。その女の荷物は、衣類などは幾許もなく、累々たる反故が其の財産となつてゐる。主人が怪んで、何故にそんなものを寄せ集めるかと聞いても、本人も何故かわからん。唯好むからと云ふのみである。甲府の或る富豪の夫人に反物を集める習癖のあるものがあると

聞いた。年々歳々其の買ひ集めるものは夥しいもので、藏に一杯積んである。さてそれを何うするかといふに、敢て仕立て、みづから着るでもなく、これを親族や使用人に頒つでもなく、勿論これを賣るやうのことはない。唯集めて藏に満ちてゐるのを時折見て悦に入つてゐるといふなどは、どう考へても病的の範圍に屬すると思はる。これも一種の道樂であるけれども、斯くの如き極端で變態のものは、或は除外するが妥當であるかも知れぬが、此類のものは世間決して少なくないから、百道樂の末に添附して置く。

春城筆語終

昭和三年八月

四日印刷

(春城筆語)

昭和三年八月

七日發行

定價貳圓五拾錢

著者

東京市牛込區東五軒町三十五番地
市島謙吉

吉

發行者

東京市牛込區辨天町百五十七番地
種村宗八

八

不許複製

印刷者

東京市牛込區櫻町七番地
竹內喜太郎

郎

發行所

東京市牛込區早稻田
早稻田大學出版部

(振替 東京一三二四三
名古屋二三八〇五
大阪六八九〇五)

日清印刷株式會社印刷

市島春城著

隨筆春城六種

趣味讀本たると同時に人生哲學

いかさま隨筆、ゴシップ雜文の横行する現代に於て、正に著者の隨筆は卓拔。著者は稀有の人情通、藝苑通、史實通、圖書通、政治通、等々であり而も縦横透徹の見識を語るに圓熟玲瓏の話術を以てする所、眞に天下獨歩である。銷夏新秋の高級讀物とのみ見るは當らず、就いて無盡の教養、趣味の啓發を享け給へ。

目次大要 (一) 感興深き追懷 (二) 檀窓舊夢談 (三) 圖書その折々 (四) 趣味談採餘 (五) 意外録 (六) 衝口發

大隈侯一言一行	市島春城著	三六判五四〇頁	價 二・三〇
藝苑一夕話	市島春城著	寫眞版多數入	稅 二・二〇
		三六判全九〇〇頁	價各二・三〇
		總布函入美裝	稅 二・二〇

東牛 京込 振替 行發部版出學大田稻早 東大 京阪 一六八〇 二〇〇九

市島春城著

春城隨筆

面白い隨筆を讀みたい人は先づ第一に本書を讀め!

讀書界の人氣を沸騰させ、幾萬の讀書子に深い感銘を與へた『隨筆頼山陽』の著者、春城先生が現代隨筆界の最大權威たることはいふ迄もない。事實、著者ほど博覽にして多方面の趣味に通じた者は尠かろう、本書はこの多方面の趣味を最もよく表現したもので、機智縦横、諷諭百出、筆鋒愈冴えて讀者をして酔へるが如くならしめる。眞に天下一品の隨筆集である。

目次大要
 上篇 雅俗相半録——婦人の決闘——元祿義擧の隠れた後援者、切支丹珍話、搦摸の著述、金貸し東叡山、縁切寺、以下百十數項。
 下篇 趣味叢叢——寺は趣味の淵藪、茶人の趣味教育、反古趣味書簡の區趣味、豆本蒐集談、酒趣百則、以下十數項。

東牛 京込 振替 行發部版出學大田稻早 東大 京阪 一六八〇 二〇〇九

工4F-16

市島春城著

隨筆賴山陽

三六判七二〇頁
口繪多數入美裝
定價參圓
郵稅拾貳錢

增訂新版

▼本書は何故、無際限に賣れる？

(一)材料は著者が四拾年間苦心蒐集したもの、而も從來の著述中に漏れた斬新な材料を網羅したこと(二)山陽に對する褒貶的態度を超越して其人間味を赤裸々に表したること(三)隨筆體に面白く描き、どの頁を讀んでも趣味津津たること、などが主なる理由であらう。今回更に新發見の材料に依る記事八十餘頁及珍奇な寫真數葉を添加した。殊に竹田が寫生した山陽竹田對座の圖は山陽の肖像畫として眞に天下一品である。

京東 振替 行發部版出學大田稻早 京東 込牛
三二一 一 京東 振替
〇〇九八六 阪大



